

学校経営方針(中期経営目標)	昨年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
教育方針「人間性」「先駆者精神」「克己」の理念をあらゆる教育活動に活かし、知徳・体のバランスに配慮した生徒一人一人の学力の向上と個性の伸長を図り、地域社会から期待される人材の育成を図る。スーパーグローバルハイスクールの指定を機に策定した、グローバルリーダーを育成するための5つの力「価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力」を土台に、WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業において育成する6つの資質・能力を育む。 *①歴史をとおして世界を俯瞰する力②多様な文化的背景を持つ人と協働する力③科学的に思考・吟味する力④新たな価値を創造する力⑤課題解決の枠組みをデザインする力⑥困難な状況を突破する力 平成22年度策定「Mission Statement」の実現 ◆ミッション 「自律する人間」の育成 ◆ビジョン ○育てる生徒像…克己心・挑戦・自己理解・目標の設定と達成・夢の設計と実現 ○実行する教育…考える力育成・克己への支援・心身の鍛練・社会性育成 ◆長期目標 ○在校生…課題を発見し、考え、まとめ、発信できる。 ○卒業生…母校に誇りを持ち、社会に貢献する。 ○中学生…夢が叶う高校として憧れる。 ○教職員…夢を共有し、ビジョンの実現を目指し、協働する。	○学習指導:スマートスクール事業やコロナ禍における創意工夫により、ICTを活用した授業が進んだ。確立した探究活動の指導法にSTEAM教育の要素が加味され、探究の質も高まった。引き続き、自ら問いを立て、自ら考え、動くことができる主体的な生徒を育成する必要がある。 ○生徒指導:全年間とも挨拶、服装、言葉遣いが正しくできた。引き続きマナーや時間を守ることを重点的に指導する必要がある。 ○人権教育:コロナでの休校を経た学校再開後、直ちに人権教育を実施し人権の大切さを認識させることができた。あらゆる機会に自他尊重の精神を涵養し続けなければならない。 ○WWL:拠点校として、コロナ禍における多くの制約下、対面とオンラインのハイブリッド型で教育実践やカリキュラム開発を進めることができた。 ○学校行事:コロナ禍において、ICTを活かした新たなかたちでの学校行事を行うことが出来たが、多大な労力を必要とすることが課題である。 ○部活動:多くの制約がある中で、体育系・文化系ともに創意工夫をこらした取組を継続し、全国大会へ出場する部も多く、大会が中止になっても前向きに活動できた。学習と部活動の両立をめざしつつ、効率的で安全な活動を模索し続けなければならない。 ○広報活動:来校人数の制限はしたものの、生徒が主体的に運営する学校説明会や、HPのタイムリーな更新を実施し、特色ある教育活動を広報することができた。コロナ禍においては、本校の特長をよりアピールできるHPへのバージョンアップをはかることも必要である。	平成22年度策定の「Mission Statement」と新たなミッション「グローバルリーダー育成」の目標達成のために、以下の点を重点として実践する。また、この間の成果を継承しつつ、5年後、10年後の学校の在り方を検討し、スクール・ミッションを再定義し、スクール・ポリシーの作成を進める。 (1)自他尊重の精神を基盤とする人権感覚を涵養し、規律ある中で互いに助け合い切磋琢磨する質の高い学習集団を作る。挨拶から出発し、対話(主張と受容)を重視することで主体的な思考を促す。 (2)学びを第一に学習・部活動等の教育活動を行う。学んだことを整理、体系・系統化、応用、共同思考することを意識し、その際にはICTの効果的な活用も図る。 (3)キャリア観を形成しつつ学力を伸長し、希望進路の実現を図る。 (4)WWL拠点校・スマートスクール事業実証研究校としての次の三つの重点項目を実践する。 ①カリキュラム開発 ②BYODを活かした授業改善、教育的活用 ③対面＋オンラインによるグローバル教育の推進 (5)単位制の特長を活かした教育活動の充実と、新学習指導要領のカリキュラム及び科目研究をさらに進める。 (6)部活動を通して、各部の目標達成をめざすとともに、自律する人間の育成と個性伸長を図る。 (7)本校の教育実践や生徒の活動を積極的に広報することにより、本校の教育活動への理解を深める。

評価領域	重点目標	具体的方策	総括		成果と課題
学習指導	単位制の特長を活かしたりベラルアーツ教育を推進し、生徒の学力・教養力向上を図る。	あらゆる教育活動を通じて思考力・判断力・表現力を養い、生徒一人一人が主体的に課題を設定し自学自習に取り組むよう指導する。	A	A	・今年度の1年生から1人1台端末が導入され、グループワーク等でICT機器を効果的に利用するなどICTの活用をいっそう進めることができた。 ・コロナ禍で自宅待機を行う生徒に対して授業配信をすることで、生徒の学びを止めない工夫をすることができた。 ・今後はタブレットを「使うこと」が目的化することがないように、タブレット導入のメリット、デメリットについて十分に継続的に検討を行い、効果的な活用方法について考える必要がある。 ・生徒が主体的に自学自習へ取り組むように、適切な学習課題について工夫する必要がある。
		「鳥羽の学びネットワーク」とICTを活用した効果的な教科指導（アクティブ・ラーニング等）により、学びの質や深まりを強化する。	A		
		学科やコースの特色に応じた教育計画を策定、実施し、学習状況調査、授業評価、学力状況等により検証を行う。	A		
生徒指導	ルールとマナーを守る態度を育成する。	基本的生活習慣の確立、安全指導及び問題事象の未然防止について、その目的・基本姿勢を確認し、教職員が一致した基準・方法で指導する。	A	A	・生徒指導件数は少ないが、引き続き教職員の共通認識のもと一貫した指導を維持することが大切である。 ・BYOD初年度であったが、iPadの不適切な利用があった。早い段階での情報リテラシー指導が必要である。 ・自発的に挨拶ができる生徒が多く、その姿勢が他の生徒にも自然と広がっている。教職員、生徒で協働してこのような学校文化を守り育てる必要がある。 ・コロナの影響で、校外でのイベントやボランティアに参加することは難しかったが、学校説明会のボランティアとして主体的に活躍する生徒が多く出てきた。 ・校則については社会の状況が変化するなかで、現在の校則の在り方について、今後議論していくことが必要である。
		挨拶を交わす、正しい言葉を遣う、身だしなみを整えることは、マナーの基本であることを理解させ、実践できるよう指導する。	A		
	これからの社会づくりに積極的に貢献する態度を育成する。	生徒会、各種委員会、クラス活動、ボランティア活動などを通じて、協働する力を養う。	A	A	
		部活動を通して、技能を修得するだけでなく、思考力・判断力・表現力を育成し、主体性・意欲の向上につながるよう指導する。チーム内で切磋琢磨し、より高い目標を設定し、突破する力を養う。	A		
		ルールとマナーを守り、自他を尊重する人間関係を築き、違いを認めあう寛容な心を育てる。	A		
		各種イベントやボランティア活動への参加を促し、社会貢献への意識を高める。	B		
組織的にいじめの未然防止を図る。	いじめについての理解を深め、「いじめ防止対策推進法」「京都府いじめ防止基本方針」「鳥羽高等学校いじめ防止基本方針」に則り、いじめ対策委員会を中心に組織的にいじめの未然防止、早期発見を図る。	A	・いじめについては、引き続き担任、教科担当、部顧問、保護者との緊密な連携により、早期に発見し、対策をとるようにする。		
人権教育	あらゆる教育活動をととして人権教育を推進する。	自他を尊重し人権問題を自分ごととして考える精神を養い、多様化・複雑化する人権問題の解決に向けた人権教育を推進し、教職員研修を充実させる。	A		・教職員対象の人権研修を含め、日常的教育活動を行う上で。更に人権意識を高める取組の継続が必要である。
進路指導	生徒一人一人の進路希望を実現する。	分掌、教科との連携のもと、組織的な指導体制により、個に応じたきめ細かい進路指導を行う。	A	A	・担任と分掌や教科の連携をより強化し、生徒の進路実現を推し進めることができた。 ・京都南ロータリークラブや京都中小企業家同友会と継続的に連携することで、自らのキャリアについて考える機会をつくることができた。
	職業観・勤労観を育成する。	望ましい職業観・勤労観を身につけさせ、主体的に進路を選択する能力・態度を身につけさせるため、計画的・継続的に進路指導・キャリア教育を行う。	A		
情報教育	タブレット等のICT機器を活用し、広く（グローバルに）、新時代（AI, Society 5.0）を主体的に、創造的に拓く態度を育てる。	情報リテラシーを身につけ、ICT機器を正しく効果的に活用することで、知識を体系・系統化、応用し、意見交流することができるようにする。	A		・BYODがスタートし、ICT教育推進担当による教員研修（HAD会）の実施により、ICT機器の活用に関する教員側の理解や実践が一気に進んだ。一方、生徒が主体的にICTを活用する環境づくりが必要である。
グローバル人材育成	WWL事業拠点校・グローバルネットワーク京都校として、グローバル・リーダーの素養を涵養する。	平常の授業に加え、対面やオンラインでの国内外の人々との対話をととして、広い（グローバルな）視野を持って思考・判断・表現する力を育成する。	A		・コロナの影響で対面での国際交流はできなかったが、オンラインでの交流を活発に行うことで、グローバルな視野を獲得することができた。
保健・特別支援	健康の保持増進と支援の必要な生徒の課題解決に必要な学校環境作りを進める。	検診等の結果を踏まえ、生徒の心身の健康の保持増進に努め、学校における保健管理、安全管理を適切に進めるとともに、支援の必要な生徒の教育的ニーズに応じて学習上、生活上の困難を改善する。	A		・支援や配慮の必要な生徒に対して計画的に会議を開き情報共有をはかることができた。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、外部機関と連携し、適切な支援の方法を考えることができた。
読書指導	読書活動を推進する。	図書館利用を促進して読書活動を活性化し、豊かな教養と広い視野を育てる。	A		・図書館だよりの発行や新着図書の紹介等をととして読書活動を活性化することができた。
家庭・地域社会との連携	家庭・地域・社会との連携と交流を積極的に行う。	HPをはじめ、説明会や出版物等を通じ、本校の教育活動に関して幅広く積極的な情報発信を行い、本校への理解を深める。	A		・タイムリーなHP掲載や学校説明会における生徒ボランティアの活動や生徒による実践発表等をととして、本校の教育活動を幅広く積極的に発信することができた。
施設設備・文書・情報管理	学習環境の質を確保する。	生徒の安全を確保するとともに、よりよい教育環境づくりに向けて施設・設備の充実を図る。	A	A	・同窓会の援助による生徒用ロッカーの設置、6棟トイレの改修、トイレの自動水栓の導入、エアコンの清掃、Wifi環境の整備により、教育環境の充実をはかることができた。 ・3棟の1室を自習室として確保することができた。 ・個人情報の管理については教職員一人ひとりの意識を更に高めていく必要がある。
	個人情報に配慮した文書管理・情報管理を行う。	紙文書、デジタルデータともに、個人情報に配慮した適切な文書管理・情報管理を行う。	A		

評価の基準 A：十分達成できている。（目標以上の成果が得られている。） B：ほぼ達成できている。（ほぼ目標通りの成果が得られている。） C：達成できているとは言えない。（成果はあったが、目標は達成できていない） D：ほとんど達成できていない。（ほとんど成果が得られていない。）

学校運営協議会による評価	従来の文理の壁を越えた教育課程が実践されており、社会に開かれた教育活動が行われている。熱心な指導者の下、ルールとマナーを尊重する心優しい生徒が多く、安心して通える学校づくりがなされていることが地域で一定の評価を得ている。ICT教育の推進にも熱心に取り組んでいることも評価できる。
次年度に向けた改善の方向性	ICT活用の進展などの新しい教育活動と、事務を含めた教職員の業務負担軽減・効率化の両方をはからねばならない。物事には不易と流行があるが、教育における不易の部分である「誠実さ」や「おもいやり」、「優しさ」などを大切にしたいうえで、これからの社会や時代に応じた変革をすすめてもらいたい。